



酒田市 鳥海山荘からの夕景

すすき野を満たす 夕暮れのカクテル

 荘内銀行

Cradle

秋号

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

令和6年10月1日発行
2024 Autumn vol.84

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 株式会社 出羽庄内地域デザイン | 電話0235 (64) 0888
制作／Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 | コマツ・コミュニケーション | 電話0234 (41) 0012

志をつなぐ人、手から手へとめぐりめぐる物語

Cradle

秋号

vol.84
2024 Autumn

出羽庄内地域文化情報誌 [クレードル]

特集
絹のきた道、ゆく道



ご自由にお持ちください
TAKE FREE

左内への手紙
[2通目]

シルクを生む風土

ファッションジャーナリスト

高橋 牧子



松ヶ岡開墾場五番蚕室

鶴岡出身だと話すと、あの面白い名前のイタリアンのある？とか、藤沢周平の故郷？と言われることが多い。ファッション

の取材で通うパリ・コレでは、隣席に座った有名なフランス人芸術ディレクターに「来週から羽黒山へ山伏体験に行くよ」と返されて驚いたこともある。「明治維新で刀を鍔つらに持ち替えて養蚕したとこね」と言われたことも。鶴岡はとかく自己PRが不得手な土地柄だが、シルクの産地としては知人ぞ知る存在なのだ。

かつては国の基幹産業だった日本のシルクが安価な中国製などに押されて衰退の一途をたどった中で、松ヶ岡を中心とする鶴岡シルクはなんとか頑張っている。廃材を再生してセンスが光る製品にした「KIDISO」の開発を始め、有名ブランドとのコラボや素材提供など時代に合わせて懸命にアップデートしてきた成果だと思ふ。

コロナ禍で意識が変わり、身体に心地良い素材を求める流れや、環境への配慮から、天然素材の人气が復活している。個人的には、東京の友人からもらった鶴岡シルクのモダンな柄の細いスカーフがお気に入りだ。ただちや豆柄をシックに表現したストールも重宝している。

鶴岡シルクの大和匡輔社長は「変わらなければ、守れない」が経営の信条のようで、

まさにいま世界中の老舗が直面している課題でもある。

鶴岡は養蚕から織り、縫製など絹製品の一貫した生産工程が地域内で可能な産地で、世界でも珍しい。日本のブランドが世界で活躍できているのは、こうした産地が日本には存在しているから。


最近「MINGEI」などといわれて世界的に日本の工芸が注目されている。先日、世田谷美術館で開催された「民藝」展のパネルトークになんとも素敵な刺し子の足袋があると思ったら、なんと1940年ごろの庄内で作られたものだった。

糸や生地作りはよく「和食」に例えられる。鶴岡の食文化はユネスコからも認定されている。和食に良い水と昆布とかつお節が大切なように、鶴岡のシルクにも良い水や手間暇を惜しまず、情熱を込めてものづくりをするような風土があると思ふ。

そういえば、デザイナーの森英恵さんに生前お聞きした話を思い出す。森さんが水戸市芸術振興財団の理事長に就任した理由を尋ねたら、まず人の縁を挙げた後、「だって食べ物美味しいから。創造には良い食べ物が必要だからね」。シルクと食。どちらも鶴岡の貴重な財産なのだ。ファッションという仕事を選んだ私にとって、鶴岡出身で良かったという心からの思いがある。

たかはし・まきこ | ファッションジャーナリスト

国内外のファッション動向や有名デザイナーなどを長く取材。専門紙記者や朝日新聞ファッション担当編集委員を経て2023年、フリーに。数多くの媒体に寄稿しながら、国際ファッション専門職大学の客員教授や各コンテストの審査員、テレビやラジオのコメンテーターなども務める。朝日新聞で「モードの分岐点」を連載中。鶴岡市旧七軒町で生まれ、鳥居町で育つ。内川の流れや月山・鳥海山、お堀のあたりの眺めなど鶴岡には好きな場所が山ほどあるという。



紀元前に中国で生産が始まり、日本に伝わった絹。
その後、各地に絹織物の産地が生まれ、
庄内・鶴岡では明治時代に産地が形成されて
現在は国内唯一の一貫製造工程が残る地となっています。
鶴岡の絹のはじまりの場所、松ヶ岡に立って
絹がきた道を感じながら、私たちがゆく道先を見つめます。

特集 絹のきた道、ゆく道



10棟の大蚕室が立ち並ぶ明治時代の松ヶ岡開墾場。鶴岡シルクの歴史は、旧庄内藩士たちがこの地を開墾したことから始まった。

絹をめぐる 時間旅行

鶴岡・庄内の絹織物は、明治時代に産業を興した旧庄内藩士たちの志を大切にしている人々によって今に受け継がれてきました。その思いとは何なのか。シルクに見る「侍たちの志」の旅へ。

特集

絹のきた道、ゆく道

『「ころざし」とは武士の『士』に『心』と書きます。152年前の旧庄内藩の武士たちが、なぜ鶴岡城下から8キロも離れた松ヶ岡まで歩いて来て、荒地を開墾したのか。それは、農民の土地を取り上げず、米を作らず、未開拓の地に新たな産業

を興すことで国に貢献し、戊辰戦争に敗れて賊軍とされた庄内藩の汚名を払拭するためです。世のため人のために仕事をし、自分たちの地域を誇れる形にして未来につなぐ。それが先人たちの志でした。そう語る鶴岡シルク株式会社代表

取締役の大和匡輔さんが、捺染業を営む家業を継ぐために、鶴岡に帰郷したのは平成5年。侍たちによって興され、明治時代後半から産業クラスターを形成し、鶴岡の近代化を実現させたシルク産業が、すっかり斜陽産業になっていった時代でした。「日本のシルク産業は明治・大正期を支える基幹産業でした。でも戦中戦後を経て安い外国産のシルクや合成繊維が取って代わるようになり、国内でシルクを作る会社はほぼなくなり、残っていました。鶴岡にはかろうじて数社も大赤字を抱えていたのでやめた方がよいのではと考えたほどです」。しかし、酒井家17代目当主酒井忠明

さんや当時の市長・富塚陽一さんら地域の先輩たちから、「庄内のシルク産業をどうにか残してほしい」「自分たちの代でやめてはいけない」と強く継続を促されます。大和さんはその思いを深く受け止め、庄内の歴史やシルクの技術、特性を学び、「ただ守るだけでは守れない。変わらなければ残れない」と思い至り、その方法を模索し始めました。

成21年に鶴岡市の「シルクタウン・プロジェクト」スタート、平成29年に日本遺産認定「サムライゆかりのシルクー日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ」と、シルクを地域の観光文化資源とする動きに発展。鶴岡市による松ヶ岡開墾場の整備も

始まり、令和4年には四番蚕室が絹織物体験施設「シルクミライ館」として生まれ変わりました。その間に庄内のシルク産業にも大きな転換点がありました。鶴岡のシルクを世界に発信するブランド「Kijiso」の誕生です。

平成11年、慶應義塾大学先端生命科学研究所開設に向けて開催されたワークショップで、座長の妹尾堅一郎氏が、鶴岡のシルク産業について「シルクロードの北限であること」「製造工程がすべて残る日本唯一の産地であること」などを述べ、シルクが貴重な地域資源であるとの認識が人々に広がります。その後、平成15年「シルクサミット」初開催、平



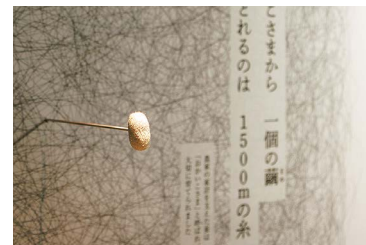
一番蚕室「松ヶ岡開墾記念館」では、侍たちが刀を鎌に持ち替え、開墾した旧庄内藩の歴史を伝えている。



現在の松ヶ岡開墾場。平成29年に日本遺産ブランド戦略「松ヶ岡クラフトパーク構想」が立ち上がり、整備が進められている。



現在、三番蚕室では6月と9月に養蚕を行っている。見学可。



四番蚕室「シルクミライ館」は、鶴岡シルクの産業について学ぶ体験施設。



ピノ・コッリーナ
ファームガーデン&ワイナリー松ヶ岡
開墾場に隣接するワイナリー&レストラン。農業を極力使わず、科学的データに基づいて栽培するぶどうでワインを醸造。ぶどう畑を一望できるレストランではイタリアンフレンチを楽しめる。



松ヶ岡紅茶

いついせん
一翠苑
二番蚕室を活用した休み処。シルク入り麦きりや松ヶ岡紅茶を提供。併設の産直では地域の農産物や工芸品を販売。



シルク入り麦切り



kibiso
tsuruoka silk

希少なきびそ糸にオーガニックコットンやウール、麻など多様な繊維を組み合わせたテキスタイルを豊富に開発。それらを用いたストールやバッグなどの商品をはじめ、須藤玲子さんによるオリジナルデザインの商品など。

侍絹

samurai silk

鶴岡が絹織物製造の一貫工程がそろった日本唯一の地として日本遺産に登録されたのを機に開発したブランド。鶴岡のシルク生地を用い、地元企業とコラボレートした商品を開発。だだちゃ豆や稲穂など鶴岡らしいモチーフがデザイン。



MAKINU

鶴岡のシルク産業の品質、技術力、美意識の高さを象徴するハイブランドシリーズ。松岡株式会社で開発した伸縮性の高い素材「シルク2」を使い、やわらかくふわとした手触りが最大の特徴。スカーフは「正倉院文様」をモチーフにしている。



鶴岡・庄内のシルクをサステナブル(持続可能)でエシカル(倫理的)な社会のモデルに。松ヶ岡開墾場では、「侍たちの志」を未来につなぐ取り組みが進められています。

「きびそ」とは蚕が最初に吐き出す糸のこと。太くて硬いため織物には不向きとされてきました。その糸の存在を、鶴岡シルクタウン・プロジェクトのプロデューサーを担っていた元東京ファッションデザイナー協議会会長の岡田茂樹さんが松岡株式会社の製糸工場で見直し、織物業材としての可能性を予見。鶴岡織物業協同組合と世界初となる織物業のきびそ糸を開発しました。

これを機に大和さんたちは鶴岡・庄内産のシルクをブランド化して世界に発信する鶴岡シルク株式会社を設立。平成22年、テキスタイルデザイナーの須藤玲子さんを筆頭に、ファッションデザイナーのmatoh、ミントデザインズ、シアタープロダクツといった国内の精鋭クリエイターの力を結集し、鶴岡シルク初のブランド「kibiso」を開発、国内外に発表しました。

そして近年、「侍絹」と「MAKINU」という2つのブランドも新たに開発しました。どちらも庄内で養蚕、製糸、精練、手捺染をした地元産シル

クを用い、庄内の優れた職人たちと世界的に活躍するデザイナーと共同で作られています。

「今、ファッション業界は合成繊維を多用した安価な大量生産・大量消費型のファストファッションを普及させて地球環境に負荷をかけていることから、世界2位の汚染産業といわれています。しかしもともと日本人は着物を仕立て直して子や孫が着続け、雑巾にして使い切るまで大切にしていました。着物地としても愛されてきたシルクは、半永久的に糸を生産し続けられ、最後は土に還るという持続可能な素材です。世界がサステナブルでエシカルな社会へと向かっている今、シルクは時代のモデル素材なのです。そのサブライ



シルクミライ館内のkibisoショップでは鶴岡のシルク製品ブランド「kibiso」「侍絹」「MAKINU」を展示販売しています。9:00~16:00営業/水曜定休

チェーンを国内で唯一有する鶴岡は、「本物」を作る産地として、世界のトップを走っています」。

もう一つ、大和さんが大切にしていることが、シルク産地だけでなく、先人先輩の志「スピリッツを未来につなぐこと」です。その拠点として、令和2年に松ヶ岡開墾場の四番蚕室にシルクミライ館ができた意義は大きいと話します。また、「松ヶ岡開墾のフロンティア精神とスピリッツ」に共感し、隣接地にぶどう畑を作り、同年に開業したワイナリー&レストラン「ピノ・コッリーナ」の存在も大きく、松ヶ岡を世界に誇る地にするには、地域住民や異業種、産官学民みんなが志を共にして、行動することが大切と話します。明治の激動期、松ヶ岡の荒野で鋤を手を開墾士たちが抱いたふるさとへの思いは、今も脈々と松ヶ岡に息づいています。



大和 匡輔さん

鶴岡市生まれ。大学卒業後、東京の外資系製薬会社に勤務。平成5年に帰郷し、東福産業株式会社に入社(現代表取締役社長)。平成22年、鶴岡シルク株式会社代表取締役に就任。鶴岡織物業協同組合理事。

特集

絹のきた道、
ゆく道

国内のシルク生産地としては最も新しく、北限にあたる鶴岡。このシルクロードの終着点で、先人たちの志を受け継ぐ歴史ある蚕室が未来へとつながる場所に生まれ変わりました。「シルクミライ館」から、拓かれゆく新たな時代へ。

つむぐ、つなぐ、未来へ

「過去を学んでこそ未来が見えてくる」シルクミライ館は、見て、聞いて、触って、感じながら学べる体験施設として、鶴岡の蚕業と産業にまつわる展示とショップを内設しています。「シルクは抗菌、抗酸化作用があつて、人間に最も近い素材で肌によさしいんです」大和さんの案内を聞きながらメモを取る子どもたち。今年8月、慶應義塾幼稚舎と慶應義塾横浜初等部の6年生希望者が鶴岡探究合宿で訪れていました。

シルクミライ館は観光で訪れる人はもちろん、地域内外の小中学生や高校生、企業経営者などの研修にも活用されています。「産業革命以降の大量生産・大量消費・大量廃棄の経済社会から、21世紀はサーキュラーエコノミー〈循環型経済〉に移行するといわれています。シルクという持続可能な素材はその象徴です。



シルクミライ館では1つの繭(まゆ)からkibisoショップの製品になるまでを、見て触れて体験できる。水曜日休館、入館無料。

私たちの先人先輩が『世のため人のため』にこの地を拓き、本物のメイドインジャパンのシルクを残してくれた意味を、子どもたちをはじめ人々につないでいくのがこの施設の役割で、私たちの使命です」と大和さん。シルクロードの終着点は、次の時代への出発点へ。シルクミライ館は人と未来をつなぐ場所です。

「本物」を知る新しい時代の担い手に

— 富田勝

旧庄内藩士たちがこの地を開墾したその原動力と心意気は何かと考えると、国の産業をつくる、それが鶴岡として子どもや孫の名誉になるという何十年も先を見越した志があつたからだと思っています。

今、鶴岡サイエンスパークには9つのベンチャーがあります。彼らは自分たちの技術や知識を世のために役立てたいという思いがまず根底にあつて、それを社会実装する手段としてビジネスをしています。僕が企業経営者や子どもたちを鶴岡、松ヶ岡に連れてくるのは、そのマインドにふれて考えてほしいからです。何のために勉強し、何のために働くのかと。現代人の多くは、テストの点や偏差値、会社の利益といった目先の数字を追いかけて本質を見なく

なつてしまいました。与えられた人生の90年、100年を何に使うのか。そのことを考えてほしいんです。

僕は学生や卒業生とよく「人生とは何か」みたいな話を大真面目に議論して盛り上がるんですが、鶴岡にはそういう雰囲気があるんですよ。また、鶴岡研修合宿に参加した企業の管理職たちとは「本物とは何か」を議論します。上手く定義できないし、答えは分かりません。それを子どもたちにも考えてほしいんです。本物とは何なのか。シルクは合成繊維が普及してもなくなりませんでした。価値を知る人がいたからです。本物は何かと考え残していく、そういう社会をつくらなきゃいけない。子どもたちにはその新しい時代の担い手になつてほしいと思っています。



1957年、東京都出身。医学博士、工学博士。2001年、鶴岡市の慶應義塾大学先端生命科学研究所の開所とともに所長に就任。システムバイオロジーの先駆的な研究者として研究所をけん引し、2023年の退任まで、ヒューマン・メタボローム・テクノロジーズ(株)、Spiber(株)など9つのバイオベンチャーの創業と多くの研究者の育成に貢献した。一般社団法人鶴岡サイエンスパーク代表理事。

特集

絹のきた道、ゆく道

● 賊軍とされてしまひ地域の存続のために養蚕業を始めて、最終的には政府に認められたことに、初めてのことも努力すれば目標は叶うのだと思いました。

● 庄内藩の人々の熱意があつて現在に至つていていると思った。いつか自分もこれほどの熱意を持ってさまざまなことに取り組みたい。

Voices



慶應義塾幼稚舎と慶應義塾横浜初等部合同の鶴岡探究合宿は今回で2回目。8月7日に松ヶ岡を訪れ、シルクミライ館を熱心に見学しました。鶴岡のシルクの歴史を知って感じたこと、未来に向けて目指したいことを聞かせてもらいました。

● 戦に負けてどん底でも必死で開墾を続け、道を切り開いた侍たちの話を聞いて、あきらめないことは大事だなと思いました。

● 藩士はイメージだとプライドが高く、庶民がやるような仕事はしないと思っていた。藩士という位を捨ててまで松ヶ岡を産業の地にしたかったんだというのが伝わってくる。

● 一つの蚕が吐き出す糸の長さが1,500mにもなることに驚きました。

● 桑の葉が約68kg、蚕が約3400頭でようやく1kgの生糸ができること知って、小さい布でも、大量の桑や蚕と長い時間をかけているのだと思った。



● 精練の前と後では触り心地が全然違いました。昔の人はすごく触り心地にこだわって、追求してこの作業をしたのだと思います。この追求するという志を大切に、私は将来、お医者さんになったら皆さんの患者さんを助けたいです。



● 昔の人々はシルクにとっても夢中になっていたと思います。私も医療の勉強に没頭し、世界で困っている人々を助けたいです。

● 僕は太陽光パネルや銅線などを使って発電機を自作しています。将来は物理学者になりたいです。



● 世界的に問題視されている地球温暖化を防ぐ方法に興味があります。世界の人々が快適に過ごせる地球をつくりたいです。

● シルクの通気性の良さとクモの糸の強靭さをかけ合わせることで究極の繊維が生まれそうだと思います。シルバーという人工繊維会社を作って、スパイバー社とコラボして最強の繊維を作るかもしれない。



Kibisoブランドの設立から参加し、2024年春夏のコレクションでは鶴岡シルクを使用した作品「命の糸」を発表した服飾ブランドmatohu。6月にイベントで来庄された際にお話を伺いました。

「命の糸」

matchu COLLECTION
手のひらの旅より

命は、命によって生かされている。
(中略) 今日食べる物も、今日まとう服も、たくさん命から与えられたものだ。

この言葉から始まるmatohuの「手のひらの旅」11作目のショートムービー「命の糸」。鶴岡シルクを使った作品が生まれた背景を、庄内の自然や歴史、食文化などと共に映像に収めています。「各地で大切に続けられてきた伝統的な手仕事を通して、人が何を作り出してきたのかを旅する。そこで発見し共感して、今度は私たちが暮らしに生かす。手から手へ循環するのが『手のひらの旅』のコンセプトです」と堀畑さん。お二人が鶴岡を初めて訪れたのは15年前、Kibisoブランド発足時にデ

ザイナーの堀畑裕之さんと関口真希子さんのブランドmatohu(まとう)は2005年に設立。「日本の美意識が通底する新しい服の創造」をコンセプトに、2018年からの最新コレクション「手のひらの旅」では各地の伝統的な手仕事を訪ね、そこから生まれるクリエイションを展開。そのものづくりの旅をショートムービーにまとめ、YouTubeで配信、発表している。



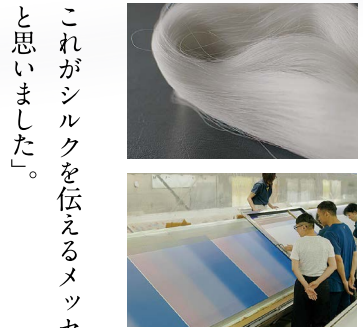
デザイナーの堀畑裕之さんと関口真希子さんのブランドmatohu(まとう)は2005年に設立。「日本の美意識が通底する新しい服の創造」をコンセプトに、2018年からの最新コレクション「手のひらの旅」では各地の伝統的な手仕事を訪ね、そこから生まれるクリエイションを展開。そのものづくりの旅をショートムービーにまとめ、YouTubeで配信、発表している。

— 手のひらの旅「命の糸」より

ザイナーとして参加したのがきっかけでした。きびそ糸を使った作品をファッションショーで発表したのち、2019年に作品発表の場をショーから映像に切り替えた「手のひらの旅」で、あらためて鶴岡シルクを旅します。

ショートムービーに台本はなく、訪れた土地で起こったこと感じたことに身を委ねているというお二人。「各地の歴史があり、人がいて、本当に特色豊かですよ。オリジナリティというのは自分たちの外側にあって、人との出会いを通して生まれてくるのだと知りました。受け身で旅することで気づく。まさに出羽三山の山伏の『うけたもう』の精神です。「命の糸」の映像制作にあたっては、蚕の死をもって生まれるシルクをどう表現しようか悩んだこともあったそう。「出羽三山の斎館で精進料理を食べている時、料理長の伊藤新吉さんが『命をいただく』と仰ったんです。そうか、命を大切に、感謝をもっていただくんだと。

これがシルクを伝えるメッセージだと思いました」。



「手のひらの旅 vol.11 命の糸」では鶴岡シルクの全工程を映像化。

「命の糸」の映像から伝わってくる1本の糸がたどってきた時間の尊さ、そのものの愛おしさ。作品にとって「愛おしさ」は大切なキーワードです。「海外では『cherish』と訳して伝えられています。cherishとは、例えばお母さんの形見とかその人にとって大事にしていること、愛おしいものをいうそうです。シルク一反を作るのに3千頭のお蚕さんの命をいただくことを知ると、愛おしんで大事に使うおうという気持ちになると思います。今の時代に一番必要なのはその気持ちを持って、ものを最後まで慈しんで使うこと。なぜこの知恵が何百年も続いてきたのかと問い、良さを見直すことで未来に向けて続けていく。そういうことをみんなで共有して社会を作っていけるんじゃないかと思えます。僕たちも未来への希望を持って、手仕事から学んで、皆さんから身にまともらえる魅力的なものづくりをしていきたいと思えます」。



美しいグラデーションで见せるシルクの染色性の表現、リネンとの組み合わせによる独特の質感など、第一線のデザイナーと職人の仕事が生きたシルクの可能性を引き出した。



手のひらの旅
命の糸

特集

絹のきた道、
ゆく道

matohu × 鶴岡シルク
新作展示販売会

日時：11月23日(土)～12月1日(日)
場所：シルクミライ館 kibisoショップ
11月23日(土)と24日(日)は堀畑さんと関口さんが在館
24日(日)13:30～トークショーを開催



幕末から明治を生きた学者、松森胤保の大著『両羽博物図譜』には、当時目にした鳥や植物が見事な観察力と筆致で描かれています。胤保さんとともに、庄内の今この季（とき）へ。

季語 — はくろ

白露

朝の日をこの身に包む白露けふ — あべ小萩

残暑もだんだんと落ち着いて
草木に露がかかるころ。
最近では暑さが長引いて
秋遠し、といったふうでも
秋の気配は日ごと見え始める。



図には「秋（すぎ）モタセ」とあり、明治18年9月、温海で確認している。地方名もさまざまで、倒木や切株などに群生する。

きのこ
山 が紅葉の色を深め、木々には多種多様なきのこが見られるように。図譜にはこの地に自生するさまざまな種を採録しています。

「モタセ種」として数多く描かれているのが、納豆汁に使われる「モダシ」と思われる図。「山林原野人里に論無く多く生ずるが為に、人之を称せずと雖も味は最良なり」とあり、ごく身近なきのこだったことが分かります。

郷土の昆虫学者・白畑孝太郎が昭和40年に著した『庄内の昆虫』には、山形県内に生息する60種類余りのとんぼ類のうち、庄内にはほぼ同数の種類が見られ、特に大山の上池下池は庄内で最も多いと書いています。

図譜には、胤保が明治の初めから同20年代に確認したとんぼが描かれていますが、戦後の農業の導入で絶滅した種も多いいわれます。とんぼは水域と陸域とで生息環境がはっきりしていることなどから、自然環境の指標種にもよく用いられる昆虫です。



ウスバキトンボ？
海を渡ってきて日本を北上する。図は明治期の7月の庄内での記録。

ナツアカネ？
名前は夏でも秋も見られる。図は明治期の8月と9月の庄内での記録。

マイコアカネ？
昭和30年代には身近だったトンボ。現在は山形県の絶滅危惧種。

アキアカネ？
日本の固有種。一時期激減したが農業散布の減少で少しずつ増えている。

コノシメトンボ
昔はよく見られたが現在は山形県の絶滅危惧種。

ミヤマアカネは深山（みやま）ではなく山の田んぼに生息。雄（下図）は成熟すると左の写真のように体が真っ赤になる。



ニホンカワトンボの雌（上）と雄（下）。明治4年5月に温海で確認。山裾の清流を好むほか、鶴岡の市街地に近い二ツ屋のケヤキの森でも見られる。

ハグロトンボの雄（上）と雌（下）。庄内では昭和30年代の採集記録後、一時絶滅状態に。後に大発生し、現在は10月上旬くらいまで比較的好く見られる。



鮭
胤 保は「魚類図譜」の中で鮭を「女ス」「男ス」に分け、その判別は顔つきで分かると書いています。また、川によって形が異なることも。産卵のため母川を遡上する鮭は、体の模様が「婚姻色」になりますが、胤保の描いた鮭には描かれていません。酒田での図写とあるため、海に近い川で捕獲したため変化が見られなかったとも考えられます。



江戸時代、鮭の自然ふ化増殖を図る「種川」だった遊佐町の月光川。現在も同水系で人工ふ化事業が行われています。

赤とんぼ

図 譜の中で目を引くのは、雌雄を描いたとんぼたち。胤保は見た目から赤とんぼ種としてまとめていますが、厳密には、赤

いけど赤とんぼじゃない。ウスバキトンボと思われる図も。どれも7月〜9月の記録で、身近な庭や山中などで確認しています。

最も美しい赤とんぼ
ミヤマアカネ



文11月の「俳同人 あべ小萩（俳人協会会員）、Cradle編集部

参考資料 白畑孝太郎著『庄内の昆虫』（みちのく豆本第28冊）、

「ほとりあの周りのトンボたち」（庄内自然博物館構想推進協議会発行）、

国学院大学 神名データベース「大俊豊秋津島」ほか

とんぼ写真提供 水野重紀さん

協力 酒田市文化資料館光丘文庫、鶴岡市郷土資料館、鶴岡市自然学習交流館ほとりあ、水野重紀さん